

「V てしまう」文の統語現象*

－ 再構造化と〔+Neg〕制約を中心に －

朴 壩一

キーワード：単文、複文、再構造化、〔+Neg〕制約

1. はじめに

本稿は、「しまう」が補助動詞として機能する「V てしまう」文の統語現象を分析し、「V てしまう」文に生じる再構造化現象と、その際現れる〔+Neg〕制約を明示していくことを目的とする。具体的には、次の3点に焦点を当てる¹。

- ・「V てしまう」文が見せる複文の振る舞いと単文の振る舞いを示す。
- ・「V てしまう」文が見せる単文の振る舞いは再構造化によって説明されることを指摘する。
- ・「V てしまう」文における再構造化の〔+Neg〕制約を明示する。

2. 先行研究と議論の在処

今まで「V てしまう」文の考察は主に「(て)しまう」の意味・用法にその焦点が置かれてきた(cf. 高橋(1969)、吉川(1973)、井上(1976)、寺村(1984)、杉本(1991/1992)、藤井(1992)、鈴木(1998)、倉持(2000)、鈴木(2001)、など)。反面、「V てしまう」文についての具体的な統語的アプローチはあまり見当たらない。しかし、「テ」形補助動詞文(「V-て-補助動詞」文)の考察のなかで「V てしまう」文についての言及は若干行われている。

例えば、影山(1993)²は「テ」形複合述語(「V1 て V2」)の分析において、V2 の意味役割付与能力と関連付け、「テ」形複合述語文の構造、特に、補部の単位(V'なのか VP なのか)を示している。このような分析を基に、影山(1993)は「V てしまう」文は VP 補部を取る複文構造であると指摘している。

* 本稿は第78回関東日本語談話会で行った口頭発表の一部を修正・加筆したものである。修正・加筆の段階で多くのご指摘をしてくださった杉本武先生と砂川有里子先生に感謝を表したい。なお、本稿の不備、誤りはすべて筆者の責任である。

¹ 本稿は「V てしまう」文の統語現象を記述することに焦点を当てている。本稿で仮定している再構造化については5節で触れているが、メカニズムとしての再構造化をどのように考えていくかは今後の課題にする。

² 正確に言えば、影山(1993)が対象としている「テ」形複合述語文は、本稿で対象としている「て」補助動詞文だけではなく、「V-て-本動詞」文も含まれている。

(1) 桜の木を切ってしまった → *桜の木が切ってしまった

(2) a. とうとう太陽が沈んでしまった。

b. 参加者はとうとう全行程を歩いてしまった。

c. みんな帰ってしまった。

(影山(1993))

(1)は「V てしまう」文の直接受身が困難であることを、(2)は文主語に制限がないことを示している。これは、「V てしまう」文の埋め込み文の主語が PRO ではなく、語彙的な主語であること、つまり「V てしまう」文は V ではなく VP 補部構造(繰り上げ構造)であることを示している³。これによって、(1)の直接受身がなぜ困難であるのかが説明される。それは、「V てしまう」文の「しまう」が受身になると、埋め込み節の目的語が主節の主語位置に移動すると考えられるが、これは埋め込み節の語彙的な主語によって拒まれるからである。

他の「テ」形複合述語文についても、同様の分析を用いて、「テ」形複合述語文の複文構造を示している。

このような先行研究の流れから、「V てしまう」文が複文であるという示唆は、三原(1997)、竹沢(2000/2004)、などでも行われている。しかし、上述したように、個々の「テ」形補助動詞文については十分に分析されているわけではなく、特に、単文のように振る舞う個々の「テ」形補助動詞文についての具体的な分析は殆ど行われていない⁴。

3. 「V てしまう」文における複文構造の根拠

本節では、「V てしまう」文における代用表現「そうする」現象、尊敬語法現象、受身化現象、NPI(Negative Polarity Item)現象、単一要素(語)現象を観察し、「V てしまう」文が複文であることを具体的に示していく⁵。

・代用表現「そうする」現象

代用表現「そうする」は直接目的語を残すことができず、V'もしくはVPの代用が可能で

³ 例(2)のようなテストは、竹沢(2004)の主語選択制限による内部構造の判断と同様のものである。

(i) 彼らがその計画を実行して-おいた。

(ii) *その計画が彼らによって実行されて-おいた。

上記例は主語に対して制限があることを示し、従って「V ておく」補助動詞文がコントロール構造であることを示唆している(竹沢(2004))。

⁴ 竹沢(2000)は「V てある」文に対しての単文の可能性を、竹沢(2004)は「V ておく/V てみる」文に対しての単文の可能性を指摘している。

影山(1993)は、「V ていく/V てくる」文の単文の見解は示しているが、具体的な分析は省いている。「V ていく」文については、次のような現象を挙げている。

(i) 子供が見知らぬ人に連れて行かれた。

影山はこのような現象について、V2「行く」が自動詞にもかかわらず直接受身が可能であることから、V1とV2が一まとまりの他動詞として捉えられることを言及している。このような説明が妥当か否かはともかく、「て」補助動詞文個々の現象を具体的にみていく必要性を示唆していると思われる。ちなみに、上述の影山の例は、本稿で対象にしている「V-て-補助動詞」文ではなく「V-て-本動詞」文である。

⁵ 「V てしまう」文の単文の振る舞いについては4節で示す。

ある(cf.影山(1993)、三原(1997/2004)、など)。従って、「V てしまう」文においても、「直接目的語・V」が「そうする」置き換えの対象になると予測される。

(3) a. ゲスト1はユーザー登録をやめてしまった。

b. ゲスト2もそうしてしまった。

(3)は、「そうする」置き換えの予測通りであり、これを基に「V てしまう」文は(4)のような複文構造を想定することができる。

(4) a. [s [s 彼/ゲスト [vp 足/ユーザー登録をやめて]] しまう]

b. [s [s 彼/ゲスト [vp そうして]] しまう]

・尊敬語法現象

尊敬語形「お～になる」、「られる」、「いらっしゃる」、などは意味的に適合する主語であれば、その主語と同一節内で照応すると考えられる(cf. 柴谷(1978)、影山(1993)、Kitagawa(1994)、竹沢(2004)、など)。

(5) a. あのお客さまは、口に合えば、あっという間にそのお酒をお飲みになってしまうだろう。

b. 大変です。団体さんがもうお着きになってしまいました。(久野(1983))

(5)は、「V てしまう」文において、尊敬語形の素性 (+Honorable) による主語と V1 の一致現象を示している。これは、尊敬語法現象の同一節内条件を考慮すると、「V てしまう」文の内部構造(繰り上げ構造、コントロール構造)はともあれ、「V てしまう」文の複文構造を示していると考えられる。つまり、(5)の構造は(6)のような可能性で示される。

(6) [主語 i [ϕ_i . . . V(+Honorable)] しまう]

・受身化現象

「V てしまう」文の場合、前項動詞に受身形「られ」が加わり、目的語の主格への格交替は起きるが(7a)、「V てしまう」全体に受身形「られ」が付くことはできない(7b)。

(7) 太郎が次郎のパソコンを壊してしまった。

a. (太郎によって)次郎のパソコンが壊されてしまった。

b. *(太郎によって)次郎のパソコンが壊してしまわれた。

直接受身化の現象が単一節内での統語操作であることから(cf. Nishigauchi(1993))、(7a)の適格性と(7b)の不適格性は、「V てしまう」文の複文構造を支持していると考えられる⁶。

・ NPI 現象

NPI(Negative Polarity Item)とは、否定的な極性(polarity)⁷の文脈にのみ現れる要素のことを言う(cf.奥野・小川(2002))。従って、NPI は〔+Neg〕要素が存在しない文中で単独に現れることはできない。

(8) a. 誰も太郎を誘わなかった。

b.*誰も太郎を誘った。

(9) a. 太郎は何も食べなかった。

b.*太郎は何も食べた。

(8a)(9a)の適格性と(8b)(9b)の不適格性については、前者には NPI「誰も/何も」を認可する〔+Neg〕が現れているが、後者には NPI を認可する〔+Neg〕が存在しないためであると説明できる。つまり、(8a)(9a)と(8b)(9b)のコントラストが意味するのは、NPI は〔+Neg〕によって認可されなければならないという事実である。そして、この NPI と〔+Neg〕の関係は、同一節内において行われなければならないという制約がある(cf.Choe(1988)、Si(1997a/1997b)、奥野&小川(2002)、竹沢(2004)、など)。例えば、

(10) a. 太郎は〔誰も花子を誘わなかったと〕思っている。

b.*太郎は〔誰も花子を誘ったと〕思っていない。

(11) a. 太郎は〔花子が何も食べなかったと〕言った。

b.*太郎は〔花子が何も食べたと〕言わなかった。

例(10a)(11a)の適格性と(10b)(11b)の不適格性について、前者は NPI を認可する〔+Neg〕が同一節内で起きているが、後者は NPI を認可する〔+Neg〕が同一節内で起きていないためであると説明される。

このような NPI と〔+Neg〕の一般的な制約を踏まえて、「V てしまう」文における NPI の生起現象を見てみると、(12)のような現象が観察される。

⁶ 間接受身化であれば「V てしまわれた」文も可能であるようにみえる。ある文脈的環境においては次のような「V てしまう」文も容認される。このような可能性と次の例文は杉本武先生から頂いた。

(i) 太郎にスイカを割ってしまった。

本稿では、典型的な受身化として直接受身文のみを取り上げている。それは、久野(1976)が言及するように、間接受身文の基底生成も考えられるからである。これらの問題については、いくつかの議論の余地があると思われるが、本稿の論点からは離れるので、これ以上は立ち入らない。

⁷ 極性(polarity)とは、肯定と否定の区別のことをいう(cf.奥野・小川(2002))。

- (12) a. せっかく学校に入ったのに、誰も卒業をしないでしまうのは、ちょっともったいないかも。
- b. 若いころの私には、小作料も払わずに使っている人には、何もしないでしまうことも多かった。

(12)では、[+Neg] が V1 の後ろに生起して NPI を認可している。これは、(12)の現象と、NPI と [+Neg] の同一節内制約を考慮すると、「V てしまう」文の複文構造を支持している⁸。

・単一要素(語)現象

ある要素が単一要素を成すなら、その内部に副助詞のような要素は介入できないと考えられる(cf.影山(1993))。

- (13) 客観的事実の裏付けのない思いこみが、時に、相手を縛り付けてさえしまう。

(13)は「V てしまう」が単一要素ではないことを示しているが、このような現象は「V てしまう」文の複文構造を直接に支持するものではない⁹。しかし、「V てしまう」が単一要素ではないという(13)の事実は、「V てしまう」文の複文構造を間接的に支持するものであると考えられる。

以上で観察した「V てしまう」文の諸現象は、「V てしまう」文が複文構造であることを示している。このような「V てしまう」文の観察は、影山(1993)の「テ」形複合述語文、三

⁸ 現代共通語においては、「V てしまう」文の V1 と V2(「てしまう」)の間に否定形「ない」が生起し難い傾向があるようである。しかし、東京都立大大学院の梁井久江氏(個人談話)から、一部の北関東・東北では「イガネデシマツク」という形が使えていること、また一部茨城においても「イガネチャツク」という形が使われているという情報を頂いた。

また、金水(2000)は「セズニシマウ・シナイデシマウ」について、「普通ならば、その状況の中で当然起こるべき出来事がおこらないまま状況が変わる」あるいは「普通ならば、その状況の中で当然行うべき行為を行わないまま状況が変わる」という意味を表していると指摘している。金水(2000)が挙げている事例は次のようなものである。

(i)・・・と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉の先まで出たのである。所をとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ(夏目漱石「坑夫」)。

(ii)己は良心の軽い呵責を受けながら、とうとう読んで見ずにしまったラシイヌの一巻を返した。

(「青年」)

(iii)その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうも何処かで見た事のある顔の様に思われてなかった。然しどうしても何時何処で会った人か思い出せずにしまった。(p.69)

⁹ 単一要素であることと、1構成要素であることは別問題である。言うまでもないことではあるが、2つ以上の単一要素が1構成要素を成して機能することは一般的に観察される。つまり、1ノード(node)下の位置に

原(1997)の「Vている」文の分析が「てしまう」文においても正しく適用されることを示唆している。

4. 「V てしまう」文における単文構造の根拠

本節では、3節で示した「V てしまう」文の複文構造とは一見相反するように見える「V てしまう」文の単文現象を観察し、そのような現象は再構造化現象であることを指摘する。

ここで、「V てしまう」文の単文構造を積極的に支持するために主に取り上げる現象は、NPI と [+Neg] の生起現象である。また、「V てしまう」文の単文構造を間接的に支持する現象として、様態副詞の介入現象¹⁰、分裂文(cleft sentence)を取り上げる。

・NPI と [+Neg] の生起現象

「V てしまう」文の単文構造を積極的に支持する証拠として NPI と [+Neg] の生起現象を取り上げることができる。3節でも触れているように、NPI とそれを認可する [+Neg] の生起には同一節内制約が働いていると考えられる。従って、「V てしまう」文は3節の(12)のように、NPI を認可する [+Neg] が V1 の後ろに生起すると考えられる。

しかし、「V てしまう」文における NPI と [+Neg] の生起現象には、(14)が示すように、[+Neg] が「V てしまう」の後ろに生起して NPI を認可する現象も観察される。

(14) a. ガリオンは何もすませてしまわなかったのです。

b. 誰もボケてしまわないうちに、もう一度自らの人生をしっかりと・・・。

(14)のような事実は、「V てしまう」文において NPI と [+Neg] 間の同一節内制約が守られていないことを示している。つまり、V1 と V2 の間に存在するはずの節境界(clause boundary)がその機能を失っていると考えられる。このような現象について、本稿では「V てしまう」文に再構造化(Restructring)が起きているためだと説明するが、再構造化の概念については次節で言及し、ここでは(14)のような NPI と否定語 [+Neg] の生起現象が、「V てしまう」文の単文構造を積極的に支持する証拠であることを指摘しておく。

・様態副詞の介入

「V1 てしまう」文において、「V1 てしまう」が単一構成素として機能しているのであれ

は、単一要素の構成素も、2つ以上の単一要素の構成素も占めることができる。

¹⁰ 三原健一氏(個人談話)から、「V てしまう」は表面上、形態的に一まとまりを成さなければならないので、「V てしまう」文における様態副詞の分布制限のテストが必ずしも「V てしまう」文の単文構造の根拠にはならないのではないかという御指摘を頂いた。このような指摘は、様態副詞介入現象・分裂文現象・右方転位現象にも当て嵌まるものであると考えられる。表面上の形態的な緊密性と統語的な結合関係の区別はするべきである点、筆者も三原氏の見解に全く同感である。本稿において、「V てしまう」文の単文の証拠として取り上げた、様態副詞の介入現象・分裂文現象・右方転位現象を間接的に支持するものであると言及したのはこのような理由からである。

ば、それを修飾する様態副詞は「V1 てしまう」の前に生起し、V1 と「(て)しまう」の間に介入することはできないと考えられ、一方、V1 と「(て)しまう」がそれぞれ単一構成素として機能しているのであれば、「(て)しまう」を修飾する様態副詞は V1 と「(て)しまう」の間に介入して「(て)しまう」を修飾することができると考えられる(cf. Kim(1993))。

- (15) a. 子供が泣いてしまった。
b.*子供が泣いて突然しまった。
c. 子供が突然泣いてしまった。

(15b)の不適格性と(15c)の適格性は、「V てしまう」文の「V てしまう」が単一構成素として機能していることを示している。このような事実は、「V てしまう」文が単文であることを間接的に支持するものであると考えられる(cf.脚注 10.)。

・分裂文(cleft sentence)

日本語の分裂文には「～のは、__だ」のような「は」分裂文と、「～のが、__だ」のような「が」分裂文を想定することができる(cf.井上(1976), 熊本(1989), 砂川(2004), など)。また、日本語の分裂文においては、「こと」標示を付加して動詞句を焦点化させることも可能である(cf.佐藤(1981))。

このようなことを受け入れ、日本語の分裂文において焦点化されるのは構成素のみであり、焦点化の位置は「～のは、__だ」、あるいは「～することは、__ことだ」の「__」位置であると仮定する(cf. 柴谷・影山・田守(1982))¹¹。

- (16) a. 彼女は彼に健康食品を食べることを勧めた。
b. 彼女が彼に進めたのは、健康食品を食べることだ。

(16)が示しているのは、「こと」節埋め込み文(16a)において、動詞「食べる」を主要部とする埋め込み節の焦点化が可能であるということである(16b)。このような事実は、V1 と V2 がそれぞれ独立した構成素であることを意味する。

しかし、「V1 てしまう」文の分裂文においては、(16)とは異なる現象をみせる。

¹¹ 分裂文と関わって、日本語は英語とはいくつかの点において異なるという指摘がなされている。例えば、日本語の場合は英語のような分裂文はなくすべて擬似分裂文であること、日本語の場合は二重焦点化が可能であること、日本語では VP が焦点化されることができること、など(cf.井上(1976), 熊本(1989), 佐藤(1981), 砂川(2004), 柴谷・影山・田守(1982), など)。日本語における分裂文については色々と議論の余地があると思われるが、本稿では分裂文について込み入った議論には立ち入らない。ただ、ここでの仮定において、日本語の二重焦点化はどう説明されるのかについて疑問が生じる可能性はあるが、焦点化されるためには焦点化される位置に移動しなければならないこと、そして、移動する要素は構成素であることを考慮すると、ここでの仮定は特に問題はないと考えられる。

- (17) a. ロミオがジュリエットを愛してしまった。
 b. *ロミオが(て)しまったのは、ジュリエットを愛してだ。
 c. ロミオがしたことは、ジュリエットを愛してしまったことだ。

(17)は、焦点化位置にV1を主要部とする埋め込み節を位置させることができないこと((17b))と、「VP てしまう」を焦点化位置に位置させることができること((17c))を示している。これは、V1と「(て)しまう」がそれぞれ独立した構成素ではないことを示している。つまり、「V てしまう」が単一構成素であることを意味し、「V てしまう」文の単文構造を間接的に支持していると考えられる。

5. 「V てしまう」文と再構造化

本節では、4節で観察してきた「V てしまう」文の単文現象は、再構造化によって説明される現象であることを示す。

5.1 再構造化現象の特徴

Rizzi(1978)は、イタリア語において、不定節(infinite)埋め込み文の接辞代名詞(clitic pronoun)が主節に繰り上がる現象(clitic climbing)と、埋め込み動詞「tornare」が主節の助動詞「è」を選択しているように見える現象を再構造化によって説明している¹²。また、Wurmbrand(2001/2004)は、再構造化の特徴として、複文における長距離受身化(long passive)やかき混ぜ(scrambling)などのような諸現象を挙げている。これら諸考察において共通して問題にされるのは、越えられないとされている節境界(clause boundary)を越えて統語的な操作が行われているという事実である。つまり、再構造化現象として取り上げられる主な特徴は、節境界が機能しないという点にある。従って、再構造化現象は、構造的に、複文構造(biclausal structure)が単文化(monoclausalization)したと考えなければ説明できない現象であるといえる¹³。

5.2 再構造化によって説明される「V てしまう」文の単文現象

4節では、副詞の介入可否、分裂文における焦点化可否、右方転位可否、NPI現象を取り上げ、「V てしまう」文が単文として考えられることを述べた。しかし、それら諸現象はすべて、前節で述べたような再構造化現象の特徴である。従って、4節で「V てしまう」文の単文の根拠として挙げた諸現象は再構造化が起きた後の現象であると説明することができ

¹² 例えば、Rizzi(1978)が挙げているイタリア語の clitic climbing の例は次のようなものである。

(i) Piero verrà [a parlarti de parapsicologia] → Piero ti verrà [a parlare di parapsicologia]

¹³ 脚注1でも言及しているように、本稿ではメカニズムとしての再構造化(Restructuring)の問題には立ち入らない。本稿で注目していることは、(本稿で取り上げた現象を含めて)複文に見える構造が幾つかの統語現象においては、節境界を失ったように振る舞う事実である(cf. Rizzi(1978), Burzio(1986), Goodall(1987), Choe(1988), Wurmbrand(2001), etc.)。

る。

しかし、それらの諸現象のうち NPI と [+Neg] の生起現象は、3 節においては、「V てしまう」文の複文構造を支持する根拠として提示した。つまり、「V てしまう」文では、NPI と [+Neg] の生起現象が同一節内で行われることも、節境界を越えて行われることも可能であるということである。前者における NPI と [+Neg] の生起現象については、再構造化が起きる前の NPI と [+Neg] の生起現象であると説明することができ、後者の NPI と [+Neg] の生起現象は再構造化が起きた後の NPI と [+Neg] の生起現象であると説明することができる。

従って、「V てしまう」文において観察される NPI と [+Neg] の生起現象は、「V てしまう」文の再構造化現象を支持する証拠であると考えられる。

6. 再構造化現象における [+Neg] 制約

竹沢(2004)は再構造化が起きる際の制約の 1 つとして、[+Neg] が埋め込み節にあると単文化は阻止されると指摘している(以下、[+Neg] 制約)。竹沢が注目したのは(18)と(19)の対立である。

- (18) a.*【太郎しかi [ti 歩かなさ] そうだ/過ぎる]
b.*【太郎しかi [PROi 歩かないで] おいた/みた/いる]
(19) a.【太郎は i [ti もちしか食べ] そうじゃない/過ぎない]
b.【太郎は i [PROi もちしか食べて] おかなかった] (竹沢(2004))

(18)と(19)で見られる [+Neg] 生起の非対称性から、再構造化には [+Neg] 制約が関与していると考えられる。つまり、(18)と(19)の対立は、Neg が埋め込み節に生起すると再構造化が阻止され(18)、Neg が主節に生起すると再構造化は阻止されないということを示している(cf.竹沢(2004))。

本節では、竹沢(2004)の [+Neg] 制約が、「V てしまう」文における否定形「ない」の生起機相からも支持されることを明示する。

6.1 否定形「ない」の生起現象

否定形「ない」は、(20)が示すように時制辞を含まない述語の後ろに生起するが、時制辞の後ろには生起することができない(21)(cf.竹沢(2004))。

- (20) a. もう喧嘩はしないと約束した。
b. 締め切りには間に合わせなかった。
(21) a.*もう喧嘩はするないと約束した。
b.*締め切りには間に合わせたない。

また、2つの動詞がそれぞれ独立している複文では、(22)が示しているように、否定形「ない」は動詞「来」の後ろ(22a)、動詞「気づ」の後ろ(22b)、また両者の後ろに同時に生起することができる(22c)。

- (22) a. 太郎は花子が来ていないことに気づいた。
b. 太郎は花子が来たことに気づかなかった。
c. 太郎は花子が来ていないことに気づかなかった。
cf. 太郎は花子が来なかったことに気づかなかった。

(22)のような現象は、「V てしまう」文の場合と異なる事実であるが、それらについては次節で言及する。

6.2 「V てしまう」文における否定形「ない」の生起様相と〔+Neg〕制約

前節でみた否定形「ない」の生起様相から、V2 が本動詞として機能する「テ」形複合述語文における否定形「ない」の生起は、V1 の後ろ、V2 の後ろ、V1 と V2 の後ろ同時に生起可能であると予測できる。

- (23) a. 子供たちがご飯を食べて遊ぶ。
b. 子供たちがご飯を食べないで遊ぶ。
c. 子供たちがご飯を食べて(は)遊ばない。
d. 子供たちがご飯を食べないで(は)遊ばない。

(23)は、V1 と V2(本動詞)がそれぞれ独立している「テ」形複合述語文における否定形「ない」の生起様相を示し、これは上記の予測どおりである。つまり、複文構造(22)(23)において、否定形「ない」は V1 の後ろ、V2 の後ろ、V1 と V2 の両方の後ろ同時に生起することができる。

一方、「V てしまう」文における否定形「ない」の生起様相は(22)、(23)とは異なる現象をみせる。

- (24) a. ガリオンはその職務を最後まですませないでしまったのです。
b. ガリオンはその職務を最後まではすませてしまわなかったのです。
c.*ガリオンはその職務を最後まではすませないでしまわなかったのです。

(24)が示しているように、「V てしまう」文における否定形「ない」の生起は、V1 の後ろ(24a)、V2 の後ろ(24b)には可能だが、同時に V1 と V2 の後ろには生起することができない(24c)。

(24a)は、複文構造(22)(23)と同様、「V てしまう」文が複文の場合であると考えられる。「V てしまう」文(24b)は、複文構造(22)(23)と同様の現象であるとも考えることもできるし、4節で示したように、「V てしまう」文に再構造化が起きた後の現象であるとも考えることもできる。

ここで注目したいのは、「V てしまう」文(24c)の不適格性である。(24c)の不適格性は、複文構造(22)(23)とは対照的な現象であり、これらを根拠に(24c)の「V てしまう」文は複文ではなく再構造化が起きた単文の場合の現象であると想定することができる。また、「V てしまう」文が単文の場合、(24b)のような現象も考えられるので、(24c)の不適格性はV1のV2の間の否定形「ない」によるものであると考えられる。言い換えると、(24c)の「V てしまう」文に再構造化が起きないで「V てしまう」文が複文であるならば、(25)のような構造として(24c)は適格文になると考えられる。

(25) [[s [s . . . V1-Neg] (て)しま-Neg]] .う]

従って、(24c)の不適格性は、否定形「ない」がV1とV2(「(て)しまう」)の間に介入しているために、「V てしまう」文の再構造化が阻止され、「V てしまう」文が単文として許容されないためであると説明される。つまり、「V てしまう」文において、V1とV2(「(て)しまう」)の間に存在する否定形「ない」は、「V てしまう」文の再構造化を阻止していると考えられる¹⁴。

「V てしまう」文におけるこのような否定形の生起現象は、竹沢(2004)が指摘した再構造化における[+Neg]制約がここにおいても支持されることを意味する。

7. まとめ

本稿では、代用表現「そうする」現象、尊敬語化現象、受身化現象、NPIと[+Neg]の現象と、「V1(て)しまう」が単一構成素として機能しているのか否かを判別するための様態副詞の介入(parenthetical elements)、分裂文(cleft sentence)現象を基に、「V てしまう」文の構造を示し、「V てしまう」文において観察される複文現象と単文現象が再構造化によって説明されることを示した。さらに、「V てしまう」文に生起する否定形「ない」の分布様相から、竹沢(2004)で提示されている再構造化の制約の1つである[+Neg]制約が「V てしまう」文においても観察されることを示した。

本論の内容は、次の4点にまとめられる。

¹⁴ (24c)の不適格性についてのこのような説明は、(24c)が複文のままでは何故いけないのかという可能性に対しては何も示していない。つまり、(24c)の不適格性は本論での説明の他に、「V てしまう」文が複文であり、他の理由から(24c)の不適格性が説明される可能性を残している。このような可能性を排除することについては、今後の課題として残す。

1. 「V てしまう」文には統語的に複文現象が観察される。これは、「V ていく/くる」分析を除く影山(1993)の「テ」形複合述語文の分析と、三原(1997)の「V ている」文の分析が「V てしまう」文においても適用されることを示した。
2. 「V てしまう」文には統語的に単文現象が観察される。
3. 「V てしまう」文に見られる複文と単文の現象は、再構造化現象によって説明される。
4. 「V てしまう」文における否定形「ない」の生起様相は、「V てしまう」文の V1 と V2 の間に生起する [+Neg] が「V てしまう」文の再構造化を阻止していることを示している。これは、再構造化における竹沢(2004)の [+Neg] 制約を支持する。

【参考文献】

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上・下)』大修館書店。
- 奥野忠徳・小川芳樹(2002)『極性と作用域』研究社。
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』くろしお出版。
- 金水 敏(2000)「時の表現」工藤真由美・沼田善子(著)『日本語の文法・時・否定と取りたて』2, 岩波書店, pp.3-92.
- 久野 暉(1983)『新日本文法研究』大修館書店。
- 熊本千明(1989)「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』17, pp.11-34.
- 倉持保男(2000)「補助動詞『(～て)シマウ』について」山田進・菊池康人・初山洋介(編)『日本語 意味と文法の風景；国広哲弥教授 古稀記念論文集』pp.289-300, ひつじ書房。
- 佐藤ちる子(1981)「日本語の分裂文」安井稔博士還暦記念論文集編集委員会『現代の英語学』pp.538-546.
- 杉本 武(1991)「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学紀要(人文・社会科学篇)』4, pp.109-125.
- _____ (1992)「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ(2)」『九州工業大学情報工学紀要(人文・社会科学篇)』5, pp.61-73.
- 鈴木英夫(2001)「『～てしまう』の用法・アスペクト論に関連して」『言語・文学研究論集』, 白百合女子大学, pp.3-17.
- 鈴木智美(1998)「『～てしまう』の意味」『日本語教育』97, 日本語教育学会, pp.48-59.
- 砂川有里子(2004)「分裂文の構造と機能」『日本語における話しことばの文法研究・研究成果報告書』筑波大学文芸・言語学系, pp.71-111.
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店。
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp.119-153.
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1982)『言語の構造・理論と分析』くろしお出版。
- 竹沢幸一(2000)「アルの統語的二面性・be/have との比較に基づく日本語のいくつかの文の統語

- 的解体の試み」『東アジア言語文化の総合的研究』筑波大学学内プロジェクト。
- (2004)「日本語複合述語における否定辞の位置と節構造」『日本語文法学会 第5回大会発表論文集』pp.175-184.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 朴 壩一(2005)「「V1 始める」文の構造と意味解釈」『KLS』25, Kansai Linguistic Society, pp.184-194.
- 三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実(編)『ヴォイスとアスペクト 日英語比較選書』7, 研究社出版, pp.108-196.
- (2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社。
- Baker, M.(1988) *Incorporations*, Chicago: University of Chicago Press.
- Burzio, L.(1986) "Restructuring constructions," *Italian syntax*, Tokyo: Reide, pp.322-394.
- Chomsky, N.(1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge: MIT Press.
- Choe, H, S.(1988) "Restructuring in Korean," 語学研究 24-4, ソウル大語学研究所, pp.505-538.
- Choe, J, H.(1996), "gukeo uijondongsa gumunui tongsaron 'sipda, boda, hada'ruel jungsimeuro", *hangeul* 232, pp.183-209.
- Goodall, G.(1987) "Restructuring," *Parallel Structures in Syntax*, Cambridge Univ. Press, pp.139-164.
- Judith, A and Perlmutter, D.(1976) "Clause reduction in Spanish," in H. Thompson, K. Whistler, V. Edge, J. Jaeger, R. Javkin, M. Petruck, C. Smeall and R. D.Van Valin Jr(eds.) *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society(BLS2)*, Berkeley, CA: Berkeley Linguistic Society, pp.1-30.
- Kim, Y, H.(1993), "uijon dongsa gumunui tongsejeok pyosang", *gukeohak* 23, pp.159-190.
- Kitagawa, Y(1994) *Subjects in Japanese and English*, New York: Garland Publishing, Inc.
- Kuno, S.(1976) "Subject raising," In M. Shibatani(ed.) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, New York: Academic Press, pp.17-49.
- Miyagawa, S.(1986) *Restructuring in Takashi Imai and Mamoru Saito(eds.), Issues in Japanese Linguistics*, Foris, pp.273-300.
- Nishigauchi, T.(1993) *Long Distance Passive*, Nobuko Hasegawa(eds.), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, Kurosio Publishers, pp.79-114.
- Pollock, J, Y.(1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, pp.365-424.
- Rizzi, L.(1978) "A restructuring rule in Italian syntax," In S.J.Keyser(ed.), *Recent Transformational Studies in European Languages*, Cambridge, Mass.: MIT Press,

pp.113-158.

Roberts, I.(1997) "Restructuring, Head Movement and Locality," *Linguistic Inquiry* 28, pp.423-460.

Shibatani, M.(1973) "Where Morphology and Syntax Clash:A Case in Japanese Aspectual Verbs," *Gengo Kenkyu* 64, pp.65-96.

Si, J, G.(1997a), "gukeoui bujeonggeukeo heogajogeon", *eoneo*, pp.471-497.

_____(1997b),"gukeoui nujeonggeukeoe daehan yeongu", *gukeogukmunhak* 119, pp.49-78.

Takezawa, K.(1987) A Configuration Approach to Case-Marking in Japanese, Doctoral Dissertation, Washington Univ.

Wurmbrand, S.(2001) Infinitives Restructuring and Clause Structure, Henk Van Riemsdijk(eds.), *Studies in Generative Grammar* 55, Mouton de Gruyter Berlin New York.

_____(2004) "Two types of restructuring-Lexical vs. functional," *Lingua* 114, pp.991-1014.